

〔翻訳〕

# ドイツ考古学研究所 —その歴史、組織、課題— (第2版)

カール ヴァイケルト 著  
酒枝 徹意 訳\*

## はじめに

ドイツ考古学研究所に関する小稿は、この施設についてのいっそう広範囲な関心を喚起し、或いは深めることが目的である。小稿は、考古学研究所創立50周年に関するA.ミヒャエリスおよび100周年に関するG.ローデンヴァルトの著作に依っている。(A. Michaelis : Geschichte des Deutschen Archäologischen Instituts 1829-1879, および G. Rodenwaldt : Archäologisches Institut des Deutschen Reiches 1829-1929) 公文書に基づき、若干の点でこれらの書物を補足し、かつ凌ぎ、さらに僅かながら修正した第2版を、ここに著わす。考古学研究所の歴史に関するより詳細な文献は、G.ローデンヴァルトの55ページ以下にある。

この小稿が、なお定かではないわが国の未来において、他の国々の研究者たちとの研究作業のなかで、古典期地中海沿岸地域の考古学的研究に、ドイツ考古学研究所が寄与することに役立ちますように。

ベルリン 1950年3月

## 1 ドイツ考古学研究所の歴史

考古学研究所は、1828年、ローマに私的な団体として基が置かれた。それは、「考古学通信協会」 Instituto di corrispondenza archeologica という名前で呼

---

\* Tetsui SAKAEDA 本学文学部教授 (人文学科)

ばれた。既にこれより十数年前に、ローマにはW.フォン フンボルトの後継者として活躍していた教皇庁のプロイセン大使であったB.G.ニーブールの指導の下に、古典古代の歴史、文化の熱狂的愛好者が集まっていた。その当時、ローマについての著作を共同で出版するという計画があった。ローマ史叙述の基礎を置いた歴史家ニーブールの傍らには、大使館の彼の後継者であるC.フォン ブンゼン、さらに教皇庁のザクセン大使、E.プラトナー、それに1822年ローマ到着後には、ボーゼン出身の若いドイツ人研究者E. ゲルハルト等が協力をしていないに違いない。フンボルト、ニーブール、ブンゼンという一連の著名な輝ける名前が、19世紀初期のローマの状況の特色を示している。アンペールの言葉に従えば、彼らによって教皇庁のプロイセン当局のみならず、ローマの古事愛好家たちの間の学問も、又代表されたのであった。満ち溢れるような若い情熱を持って、こうしたグループの中に入ってきたゲルハルトの周囲には、生き生きとした友人たちの仲間が、既に1824年には集っており、ローマの〈北方人たち〉*iperborei romani*は、一つに結ばれていた。リーフランドの文化愛好家であり、繊細な図案家のO.M.フォン シュタツケルベルクは、ミュンヘンのグリユプトテークや大英博物館にオリジナルのギリシアの宝物を齎したアエギーナやフィガリアの発掘に際しての寄与によって知られていたし、他には、ローマではハノーヴァーの大使であったシャルロッテ プフの息子、A.ケストナー、それにシュレジア出身の若く夢のような才能の持ち主のTh.パノフカ等がいた。〈北方人〉たちは、ローマの遺跡や当時エトルリアのネクロポリスから出土した大方壊れていたギリシアの壺を出来る限り広範囲に知らしめること、またその頃には比較的少数の人々によって、しかも十分には模写されていなかった様々な歴史記念碑を研究しなければならない学問を、自由にこなすことを自分たちの使命と考えていた。彼ら仲間、理想主義者であり、広範囲な支援が無くとも、こうした企てを始め、実行することが出来ると信じていた。しかし、数年後にはそれは不可能であることが明らかになった。彼らの中には、二人しか研究者はいず、次々に増えてくる歴史記念碑を、少数の北方の仲間たちで整理する仕事さえ、不適切になっていた。財政的にもいっそう不可能になっていた。そこで、ローマだけではなく、イタリアやその周辺から更に多くの同好者たちの仲間を引き入れるという計画が起こった。この計画は、プロイセン皇太子フリードリッヒ ヴィルヘルムが、1828年たまたまイタリアを

旅行した際、彼を仲間に獲得して、初めて実行され、皇太子は、そのような基礎を据えることへの支援を引き受けることに同意した。かくて1828年、ヨーロッパにおけるその種の最初の団体として考古学通信協会が、ゲルハルト、パノフカ、ケストナー、彫刻家A.ソールヴァルゼン、さらにイタリアの考古学者C.フィア等によって設立された。協会は、フランス、イギリスそれにドイツに支部を持ち、それぞれの支部長が、自国の同好者たちに連絡を取り、維持してゆかねばならなかった。支部長は、フランスでは、後に繰り返し財政的援助を買って出たリュエネ伯爵であった。イギリスでは、J.ミリングン、ドイツでは、Fr.ヴェルカーであった。ヨーロッパ全土にこのような支部を組織しようとする計画は実現しなかった。これら三カ国の内で、フランスだけが実際に行動に移った。ナポリのフランス大使であったブラカス・ドルプ伯爵が、協会の会長を引受け、ブンゼンが事務局長になり、彼に可能な遣り方と条件で協会を振興させた。本来の仕事は、ゲルハルトとパノフカが、部長としてやってのけ、ケストナーが、古文書掛として活躍し、その間ソールヴァルゼンが、造形芸術方面を代表した。さらに協会は、ローマの芸術家たちとも結びついた。協会は、はじめプロイセン大使館があるカファレリ宮殿に置かれ、1829年1月2日に、第一回目の公式会議が催され、協会の規則が決定された。協会の厳粛な発会式は、同じ場所で4月21日に挙行された。1839年には、カファレリ宮殿の近くであるカピトルの丘に協会のささやかな小さな古典的スタイルの建物が建てられたが、ブンゼンは、個人的に募金してそのための資金を集めた。協会の財政的基盤を、協会によって編集される二種の雑誌、*Bullettino*と*Annali*の予約が支えなければならなかったが、直ぐにそれは不可能であることが明らかになった。部長が、たとえ名誉職としての務めであったにせよ、まったく不規則に届く予約による資金だけでは、必要経費を充たすのさえ不足し、雑誌類の発行にさえ足らなかった。不足額を補填するのに繰り返し迫られたが、そうした時には、リュエネ伯爵が、救いの役を果たすだけでなく、部長たちも、自身のささやかな資産を抛出せねばならなかった。この資金の逼迫からの脱出は、パノフカが1829年に後を追ったリュエネ伯爵のパリ移住から始まるように思える。*Annali*は、今やフランス支部の機関紙として公刊され得、それはまた、これまでのローマの印刷所の低い作業能力に対しても、望ましいことのように見えた。このことによるローマの本部の負担の軽減は、しかし、僅かなもの

であり、まったく心配がないわけではなかった。協会の公刊物に一貫した、鋭い学問的性格が問題となるように思われ、そのためこの数年間、真剣な内部討論がなされた。しかし、フランス支部は、既に1848年の革命の年に活動を停止せねばならなかった。ケルンの教会の争いに端を発したヴァチカンとプロイセンの間の緊張が、おまけに危険な政治的影を協会の上に落しているように見え、その管理、運営には、ローマのブンゼンは、まったく不器用であったようだ。まさにこの年、協会会長のブラカス伯爵が亡くなり、ブンゼンは召還され、プロイセン皇太子によって、会長職は、メテルニッヒ侯爵に差し出された。ローマで、オーストリア大使によって為され、その際にローマ教皇が、協会は文字通りプロイセン生まれの施設、即ち「*letteraria societa essenzialmente prussiana*」であり、本質的にプロイセンの文学協会と見なしたかなり長い交渉に、第一に起因するこの緊張のために、メテルニッヒは、結局、協会に対するヴァチカンの誤解を解くことに寄与するために、受け入れる意思を表明した。しかし、財政的危機は依然として存在し、プロイセン王に援助を頼る以外に、他にまったく手立ては残されていなかった。彼は、1833年から1859年の間、繰り返し援助をしたが、ある場合は一回限りで、またある場合は年間の決められた回数に限って、徐々に増やしつつ、彼の責任で支出し、部長たちの給与も支払われ得た。こうした助成金は、協会の幅広い日常活動や、*Annali*や*Bullettino*の一定の揃いの納品冊数によって左右された。つまり、予約をかなり多数抱えているかどうかに関わった。それと共に、協会は私的なものであって、プロイセン政府は、新たに任じられた部長を改めて承認する権利だけを保持した。協会は、法的な意味で、国際的な施設であって、第一にフランスから、次いでロシアから少なからぬ寄付金が寄せられた。それはかつて無かったことである。しかし、協会の初期段階に勝手に用いられていた「国際考古学通信協会」*istituto internazionale di corrispondenza archeologica*と言う名称は、事実上存続しなかった。プロイセンが、その協会を取得し、その後は使われ得なかった。しかし、その施設が、公的に国家からの資金援助によって国立の施設となってしまうようなこともなく、より初期の援助によるのと同様に、さらに1859年以降も、協会は、協会への全ての助成金を自由に使える、ということによって、その施設の存続をプロイセンが事実上保証したのであった。同年、国家による若い考古学研究者への旅費奨励金が新設されたが、その貸付の管

理は、プロイセンが行った。

これらの奨励金は、確かに立派な業績をすでに挙げていた若い研究者たちに、地中海沿岸地域における歴史記念碑についての必要不可欠な見解を獲得する機会を与える狙いがあった。これらの歴史記念碑との接触から、初めて、創造的で真の考古学が発展することが出来た。かくて学問の後継者の育成に関して、決定的なところで、積極的に係わることが、協会に可能になった。この学問に数十年に亘って一連の決定的な刺激を与えた19世紀ドイツ考古学の成果は、この基礎の上で初めて生み出されることが可能だった。ブンゼンと共に協会の推進力であり、その後も留まっていたゲルハルトが、1837年ベルリンに招聘されると共に、たとえ決して公的ではないにせよ、本部は事実上ベルリンに移転された。ベルリンでゲルハルトは、その当時の活発な古典主義の著名な学者、文化人たちと親密な交わりを得、また協会とアカデミー、大学そして博物館との親しい関係を築いた。この地に1841年、考古学集団を設け、協会とはまったく独立に、Die Archäologische Zeitungを発刊した。

最初の総裁であった後の国王フリードリッヒ ヴィルヘルムIV世の死後、国王ヴィルヘルムが総裁を引き継いだ。1859年のメテルニッヒの死後には、会長制は続けられなかった。メテルニッヒによる会長職の引き受けが、実際協会を危険で無くはなかった政治的緊張から解放し、自由な学問的發展の可能性を与えることに貢献したが、いずれにせよその職務は、かなり立派なものと言われていた。1870年、プロイセンは、協会に定期的な助成金を拠出したが、それにより協会は、国家の組織となり、1874年バイエルンの申し出により、ドイツ帝国によって引き継がれ、この国立組織化とともに、ベルリンが公的な本部となり、ブンゼンさらに1860年の彼の死後には、ゲルハルトが本部長として責任を負ったが、傍らには、レプシウス、モムゼン、ヤーンたちのような学者がいた。同時に、規約には本部の連邦国家的構成が明記され、それによれば考古学が教えられていた大学を持ったすべての邦国は、その規模に応じて1人かそれ以上の代表者を持った。プロイセンが、その内3人がベルリン・アカデミーから推薦されていた7人の代表者を抱え、そのことによって明白な優位を維持していた。またギリシアや東部地中海方面に支部を創設するという協会創設者の例の計画は、遂行され得なかった。それゆえ、これまではローマがイタリアと共に協会の中心的活動方面であり、また

その出版活動の重心は、ここにあり、エトルスキの鏡とか瓶のそれとかのような大部な集成の遂行とか、ベルリン・アカデミーによって編纂され、U.ヘンゼンやTh.モムゼンによって指導されたラテン碑文集成への協会の協力には、ローマの研究者たちの作業能力のすべてが求められた。

脱国家的傾向をもった個別的支部から国民国家的なものへのローマ支部の変化は、一般的状況に相応しており、協会創設以来の続く120年間に、他の諸国による11の同系統の協会が、ローマに創設された。

この関係では、ギリシアに同様に色々な状況が起こっている。そこでは、フランスが1846年にフランス考古学院の設置によって先行していた。ギリシアでは、考古学研究は、19世紀前半を経るうちに、ささやかな始まりから、ギリシアの学者たちの活発な参加の下で力強く発展した。ローマ・ドイツ考古学協会は、しかし偶の旅行とかギリシアの仕事仲間からの彼らへの定期的な報告によって関与出来たに過ぎない。しかし、ある意味でこうした弱点は、アテネのプロイセン公使館に一人の若い学者が配属されることによって克服された。この最初の学者、A.フォン フェルゼンの早死が、ギリシアに旅行した研究者たちが、たとえ貧弱なものであれ、そこで学ぶことが出来る小規模な学術的図書館を持つ機会を本部に与えた。この同じ職務に、古代アテナイに関する著作（1874年）の編纂者であるC.ヴァッハスムート、さらにU.ケーラーが続いた。帝国政府によるローマ・ドイツ考古学協会の引き受けと同時に、カピトルの丘にかなり大きな協会の建物を建設すること、及びアテネに支部を創設することが帝国議会に政府によって提案されたことは当然であった。この提案は、1873年9月6日に通過した。フランス考古学学院と並んで、1874年のヴィンケルマンの命日にドイツ考古学協会アテネ支部が創設され、その支部長にはO.リュウデルが決定し、間もなくU.ケーラー、E.バーターセン、D.デルプフェルトが、更に協会運営における副支部長としてP.ヴォルターが続いた。アテネ支部創設の推進力は、E.クルティウスであったが、この《ギリシアの偉大な熱狂的告知者》は、1868年E.ゲルハルトの死後、本部のその同じ地位に就いたのであった。アテネ支部と共に、協会の任務が、例えばその支援を受けたベルリン科学アカデミーによって主導されたギリシア碑文集成のような任務が、増えただけではなく、ギリシアと小アジアにおける科学的発掘の新しい時代が始まった。最初の大規模なドイツの発掘は、同じくクルティウ

スにより、1875年オリンピアで始められた。この発掘は、国家による独自の事業であり、アテネに創設されたばかりの支部は、そのことに対する貴重な助け手であった。オリンピアの発掘と殆ど同時に、1878年以来協会の本部長であったA.コンツェの肝いりで、A.フマンの指導の下で、ペルガモンの城塞の発掘が始まった。プロイセン政府の下に建てられたベルリン博物館によって担われたこの発掘の貴重な成果は、トルコ政府から買い取られ、ベルリン博物館の所有に移った大きな祭壇の浮き彫りの作品であった。オリンピアでの発掘品、つまりプラクシテレスのヘルメス像、ゼウス神殿の彫刻、その他多くのものは、ギリシアと締結された条約に従って現地に留められた。つまり、ベルリン博物館は、小さな重複した発掘品を与えられたに過ぎない。学問的業績は、発掘者に留保されたままであった。第三の、私的な発掘ではあったが、他の2回のものより遥かに、学界だけではなく、注目されたのは、1871年以來のトロヤのシュリーマンによる発掘であった。これら全ての発掘には、協会の所員たちが参加することが出来、すでに早くから、シュリーマンの発掘とかオリンピアにおけるそれと、直ぐに有名になったW.デルプフェルトのような名前が結びついていた。どちらの発掘でもまた、若いA.フルトヴェングラーが協力し、彼は、最初のものとして初期ギリシア美術史総論を物した。アテネ支部は、間もなくこうした大規模な事業の学術センターになり、ギリシアの文化、芸術の歴史に関する重要な様々の認識は、そこから由来し、知られるようになった。協会自身は、差し当たり小規模な発掘だけを実行したが、たとえば、1879年のH.G.ロリングの指導の下でのメニディのミュケーナイ時代の円墳墓の発掘とかで、その際に、協会は素晴らしい発見に寄与したのであるが、シュリーマンの発掘は、今やギリシアの地に至り、即ち1874年ミュケーナイ、1880年ボエオティアのオルコメノス、1884年ティリンスというわけである。ロリングは、経験豊かな金石学者として、また広範囲な地誌的知識を自由にし得る地誌学者として、かつ1883年に初版が著されたベデッカーのギリシア旅行案内の学術的改訂者として、アテナイ、ギリシアと共に、アテネの協会支部の歴史も詳細に記したが、この改訂版は、またアテネ金石博物館の開設にも負っていた。ギリシア初期の陶器に関する諸成果は、A.フルトヴェングラーやG.レーゼッケによる学問的方法と共にミュケーナイ時代の土器に関する書物の中に提示された。この基礎的で、また当時画期的な研究書は、姉妹支部ローマの50周年の祝賀

に捧げられた。

ローマでは、今や伝統にまでなった方針に従って、仕事が継続されていった。永遠の都が中心であり、様々な遺跡、博物館それに収集品と共に、あらゆる国からの研究者たちの盛んな往来と共に、また彼らの明確な形式に則った社交生活と共に、その都が中心であり続けていたのであり、そうした社交の場で、もとより、暇とお金を持ち合わせ旅行することを心得ていた18世紀に遡ったような、しかし高い教養を持った滅び行く階級の者でもあった都市ローマの貴族や、高位の聖職者たちの学問、芸術の代理人と芸術作品の収集家や学問的に素養のある仲介人が出会ったのである。そのため、この多種多様ではあるが、まとまりのある無類の集団の一員であったこの明るく才気に溢れた仲間たちは、協会の会合の際には、集まるのが常だった。

19世紀の学術的であり、また芸術的かつ社会的なローマは、真に世界市民的で、知的で、永遠の都を包むあらゆる領域を含んだ広い地域的拡がりによって支えられていた。闇に覆われた初期の前史、共和制期、帝政期ローマ、中世初期などの歴史、また詩歌、音楽、劇それに造形芸術、これらのものをローマの高等教育は、長らく維持してきた。協会の学問的な作業は、この時代には、特にポンペイに向けられていた。W.ヘルビッチが、1873年カンパニアの壁画に対する基礎的な研究を公刊した、同じくその年に、A.マウが、その活動力は、協会の図書館とポンペイの両方に引き裂かれていたのだが、ポンペイの壁面装飾の四様式の時代順を識別し、1877年には、H.ニッセンによりポンペイ研究が、1887年にはイタリア地誌が著された。ローマでも、協会の考古学者たちが、膨大な収集物の目録化の作業に取り組んだ。ローマ時代の収集物に関する当時の、またある意味では、なお今日でも模範的な最初のカタログは、O.ベンドルフとR.シェーネによるラテラン博物館の古代彫刻についてのものであった（1867年）。Th.シュライバーによるルードヴィヒ・コレクションのカタログがそれに続いた（1880年）。そして膨大な収集物を除いた古代ローマの彫刻のカタログは、Fr.マッツとF.v.デューンによって（1881/82年）、そして最後は、E.ペーターセンによって始められ、W.アメルングにより完成に近づけられた。1903年以来続く、ヴァチカン博物館の彫刻品のカタログがあるが、アメルングの死後、このなお終わっていない仕事は、G.リポルドによって完成に導かれている。ヴァチカンの貯蔵庫にある彫刻の

カタログの編纂は、G.フォン カシュニッツによって完成された。上部イタリアにおける古代の彫刻に関しては、同様のカタログの仕事を、H.デュチュケが指導した（1874年～1882年）。更に、H.ヘイデマンが、ナポリ国立博物館の壺コレクションに対して（1872年）。ローマの初期時代以来の膨大な収集物には、1880年以來、R.ケキュール、H.フォン ローデンさらにH.ヴィンネフェルト等によって古代のテラコッタの収集物が加えられ、そして、C.ロベルツによって、1890年に古代の石棺の浮き彫りに関するたいそう興味深い仕事が始められたが、彼の死後は、G.ローデンヴァルトが、継続した。この全5巻が予定されている大部の作品は、長期間かかっているが、なお完成には至らず、ローデンヴァルトの死後は、F.マッツの手に渡された。ローマ考古学協会にとって、発掘の仕事は、文字的作業に比べて減少していった。アラトリとロクリの小規模な調査を、E.ペーターセンが実施したに過ぎない。

アテネ支部にとっては、その関係は、その当初から全く別であった。ここでは、輝くような芸術的かつ社交的な空間が欠けており、故郷からの距離が、空間的に遙か遠いというものだけではなかった。文化的には、殆どもっぱらただ古代の遺跡が当てにされていたのであるが、ちょうどその頃、幸運なことに、大方は学問的な監督下に、沢山の遺跡が発見された。ルネサンス期やその後の全ての時代を完全に欠いていた中世期のビザンチン時代の歴史記念碑を、ローマの中世期の記念碑と比較することは出来なかった。それ故に、アテネでは、その地の研究者たちと他の国の協会の一それらは、シューレと呼ばれていたが、こうした者たちが、密接に協力し合っていた。1882年からはアメリカ、1885年からは英国、1893年からはオーストリアのシューレが存在した。これらのかかなり自分頼りの研究者らの民主的共同体であり、既に畏敬の念さえ持たれていた1837年に創設されたギリシア考古学協会に、あらゆる学問的かつ社交的生活が集まり、集中していった。かつてのローマにおけるよりも、都を離れ、より強く眼を向けたが、そこでは、地方自体よりも、アクロポリスとその最も近い周辺が、研究の中心であった。歴史家として主に碑文の集成に貢献したU.ケーラーの後、1887年W.デルプフェルトが支部長として、P.ヴォルタースが副支部長として、協会アテネ支部の指導を受け継いだ。一連の小調査が、テゲア、スニオンそれにコリントの神殿とか、テーベのカペイロス神殿、プロイロンの劇場やメガラの市の噴水等で遂行された。し

かし、より重要なものは、ギリシア考古学協会との友好的な共同事業であった。ギリシア本土外のパロス島やレスボス島で、様々の調査がなされ、また、ベルガモン、トラレス、マグネシア・アン・メアンデルそれにプリネで、ベルリン博物館による小アジア発掘調査にもドイツ考古学協会の所員たちが参加した。アテネでは、18世紀の偉大なる前任者たち、特に好事家たちやJ.スチュアルト、N.レヴェツの後、ギリシア建築物の研究に新たに道筋をつけたデルプフェルトは、1885年プロピュライオンについてのセンセーションを引きこした最初期のプランを発見したのであった。さらにディオニソス劇場の調査研究、1892年には、より古いパルテノンの発見が続いた。デルプフェルトの印象深い人物像と夢中にさせると共に明快な彼の講演は、それ故、何十年立ってもアテネという市に、絶えず増え続けるあらゆる国からやって来る大勢の観光客に対し、その崩れ落ちた建物等の意味と歴史を解明して見せている。

帝国の管理組織となると共に、協会の出版物の形式が変わった。先ず、イタリア語、フランス語、ラテン語で、2系列を、即ち1829年から1853年、それに1857年から85年まではAnnaliを、1830年から1853年、それに1856年から1885年まではBullettiniを、それらに加えて1829年から85年まで12巻のフォリオ版のMonumenti Ineditiを、ローマ考古学通信協会が発刊した。その隙間の1854年から56年には、Monumenti とAnnali e Bullettiniが刊行された。単独の副次的なものがMonuments Ineditisと共に、1836年パリで刊行されたフランス支部による12巻のNouvelles Annalesの刊行であったが、その当時は、他の協会の出版物は、主にローマか、ただ臨時的にベルリン、ライプツヒヒ或いはゴータで発行されていた。1886年以来、協会ローマ支部のMitteilungenが発行され、1944年までに合計59巻に達した。アテネ支部では、1876年からMitteilungenが発行され、その内66巻が1941年までに現われた。本部では、1876年、ゲルハルトによって創始されたArchäologische Zeitungを自らの機関紙とし、そこでは、さらに考古学協会のSitzungsberichteが、引き続き出版され、1886年から最終年までに34巻発行された。1886年には、Archäologische Zeitungは、協会の年報Jahrbuchに取って代われ、1948/1949年の63/64巻まで続いて発刊されている。年報を継続したのは、Archäologische Anzeigerであって、それは、考古学通信協会の古い伝統を継承している。さらに、年報には、毎年刊行される考古

学論文の文献目録が付属し、これには、1943年に至るまで、内外の全文献が含まれ、さらに継続されている。結局、年報には、これまでに16巻の別巻が刊行された。それらには、その機関の大きな個別研究が、存在していた。ある意味で、Monumentiの継続は、4巻のフォリオ版と共に、1891年から1931年までの間の協会の旧き記念碑である。年報の別巻と並んで、協会は、緩い系列として、1932年から43年にかけて、8巻の古代の歴史記念碑を発刊し、さらに1925年から41年には、後期古代の美術史に関する12巻の諸研究が、1934年から49年には、9巻の絵入り古代美術が、そして最後に、1940年から43年に、5巻の古代美術に関する著作が刊行された。

アテネ支部の仕事は、長い間P.ヴォルタースによって編集されてきたMitteilungenに反映されていた。またここでも、ローマと同様に、それ以外に歴史記念碑の目録化が着手された。既に1869年、R.ケクルにより、その当時いわゆるテセイオンに保管されていた古代の彫刻作品の一覧表が刊行された。1872年、R.シェーネが石版印刷の一覧表と共にアテネ支部の収集品の中からギリシアの浮き彫り彫刻の目録を編纂し、1881年には、L.フォン シーベルが当時なおバラバラであったアテネの彫像を学問的に調査した。1885年から89年の発掘から出てきたアテネのアクロポリスの古代の壺は、P.ハルトヴィツヒ、P.ヴォルタース、R.ツァーンそれにE.ラングロッツ等の協力の下で、B.グレーフによって公刊された(第1巻、1-4分冊、1909年~25年)。

この二つの姉妹支部は、異なった制約の下で、その課題を果たしていたのであるが、これらの収集、改訂、発掘それに出版という業務の傍らに、或る決して重要でなくはない別の仕事がゆっくりと進んでいた。即ち、見習い修業とそれら後進たちの世話の問題。毎年他所から派遣されてくる給費生たち—1859年のA.コンツェとA.ミヒャエリスが最初であった—は、ローマとアテネの協会に、彼らの学術調査旅行の出発点を見出しただけではなく、あらゆる点で、そこに学問的励ましと自らが加わることを見出した。あらゆる世代の若い考古学仲間たちが、これらの高等考古学学校を経て進んで行ったのであり、それが理論的なものであれ、実際のなものであれ、とにかく協会の仕事に関与させられない等ということとはめったに無かった。ローマの廃墟やらミュージアム或いはポンペイの見学、同様にアテネにおける見学は、なおデルプフェルトの指導の下のこれらの仲間たち

の旅行を通じて補われたのであるが、若い修業者たちの訓練を十分に果たし、また、見せ掛けだけのそれまで信用されて来た問題とか、或いは新たに、なお修正されるべき問題との接触を直接的に彼らに齎したのであった。多かれ少なかれ正規の形式であれ、祭典形式であれ、協会の通常の講演会は、他の国の協会でも同様であるが、単にその協会に所属しているものだけではなく、より広範囲の専門仲間や学識者や協会の友人たちを集めた。また、自身学者として活躍している年取った考古学者たちにとっては、二つの協会支部は、写真やスライドの影響で直ぐに色褪せてしまった歴史記念碑等の生き生きした見方を取り戻すための仲介者であった。地中海沿岸地域における特別の学術的任務に対して、単に宿ばかりでなく、討議や支援それにこれら外国の地での良き協働というものが、そこには見られた。

20世紀の始まりと共に、その組織自体が変わってしまうことは無かったが、研究所の活動範囲が広がった（訳者注、以降、Instituteを協会ではなく、研究所と訳す。また本部長を所長とする）。研究所アテネ支部には、ベルガモンにおける広大な発掘の新たな指揮が与えられたが、発掘は、今ではその町の下方の都市領域にまで拡張していた。これまでベルガモンを発掘してきたベルリン博物館は、その活動をミレト、ディディマ、そして後にはサモスに移した。ベルガモンにおける発掘の指揮者には、デルプフェルトがなり、サモスの発掘がアテネ支部に割り当てられると、E.ブショールが発掘の指揮を取った。アテネ支部のこうした最初の大きな仕事の成果は、Athenischen Mitteilungenに持続的に報告、公表された。多くの歳月を費やし、なお今日でも終了していないギリシア自体での仕事が、さらに加わった。かつてデルプフェルトの協力を得たH. シュリーマンによって始められたティリンスの町の調査が、継続され、アテネ支部の気前良いアメリカ人後援者のお陰で、G.オーバーレンダーが、アテナイのディピロン前の墓地の発掘を行った。ティリンスの発掘の成果は、今日までに4巻本で公刊されている。ケラメイコスの発掘については、詳細な報告がArchäologischen Anzeigerになされ、別に4巻の最終報告が著されている。

活動と同様に、また研究所の規模も大きくなった。これまでは、その活動範囲は、古典的な地中海沿岸地域に過ぎなかった。いまや研究所は、ドイツで研究されていた先史時代の研究とかローマーゲルマン考古学に注目し始めた。これらの

領域は、この頃までは故郷の史跡保護によって、担当され、「古代クラブ」によって支援されていたが、このクラブは、1841年にボンに創設された「ラインランド古代愛好者友の会」の拡大したものであった。更に、まさに1901年に、地域的な課題には縛られない新たな組織として、フランクフルトa.M.に研究所の支所、「ローマ＝ゲルマン委員会」が、発足した。この委員会は、ずっとローマ支配下にあった領域における、最古の時代からローマ期の終わりまでの考古学的調査に、あらゆる点で助言したり、実際に援助することを業務とし、かつ学問的な公表のために自由に使える有益な機関であった。自らの発掘の実施では、ローマ＝ゲルマン委員会は、全く表には出てこなかった。委員会によって編集されたGermaniaは、これまで27巻現われており、ローマ＝ゲルマン委員会の報告書に関しては、32巻が現れている。この他に、委員会は、研究所の年報の別巻のように、17巻のRömische-Germanische Forschungenと5巻の民族大移動時代のゲルマニアの歴史記念碑、3巻の初期時代のゲルマニアの歴史記念碑、および7巻の西部ドイツと南部ドイツの古代遺物集成のカタログ、ローマ・ゲルマン期の陶器に関する一連の分冊、様々の素材を編纂、発行した。ローマ＝ゲルマン委員会と研究所の提携は、ドイツにおけるこうした研究に古典考古学との連携を齎し、確かにその仕事により隣国の者たちとの狭い共同作業を期待していた支所を全ヨーロッパ諸国の考古学研究の大共同体のなかに置いた。

イスタンブールのドイツ大使館では、既に1896年以来のペルガモンとメンデルタルにおけるベルリン博物館の大事業に対するTh.ヴィーガントの学問的職位は、ベルリン博物館のその事業の大使館付指揮者であると主張して譲らなかった。研究所が、この発掘を部分的に引き受けたために、その職位と研究所が結びつくことは、望ましいこととされた。そして1929年10月、イスタンブール支部が、トルコ地域にその痕跡を遺産として残している全ての文化的なものを結果的に包括することになる活動を開始した。古典古代の調査と並んで、先ず始めに、首都ボガツキョイにおけるヒッタイト文化の調査、さらにビザンチン研究、イスラム古代研究、それにトルコ研究にと踏み込んでいった。K.ビッテルによって指揮されたボカツキョイの発掘は、オリエント協会と協力しながら、研究所により遂行されたが、完了することなく、1940年、戦争のために中断されねばならなかった。こうした大きな事業と並んで、研究所により、かなりの数の小規模な発掘が、イ

スタンブール自体でも若干の発掘が実施された。特に活発であったのは、研究所所員たちの研究旅行であって、その組織の職務の膨大な領域に、それは及んでいた。また、隣接する領域の研究者たちの調査旅行を、常に研究所は支援していた。イスタンブール支部の働きは、1944年8月まで進めることが出来たが、その後所員たちは、トルコを去らねばならなかった。この支部は、16巻のIstanbuler Forschungenと5巻のIstanbuler Mitteilungenを編集公刊したが、Orientalistischen Forschungの最新号は、保留された。

エジプトでは、L.ボーチャートによって1906年に創設されたエジプト古代研究のためのドイツ研究所とドイツ考古学研究所が、1929年カイロ支部として統合された。これで、エジプトでも、エジプトに対しスタンブールと同様の任務が立てられた。即ち、エジプトの文化遺産として残されているあらゆる文化的なもの調査研究である。同時にまた、大エジプト学者R.レプシウスを除き、誰も、E.ゲルハルトとA.コンツェの他には所長にはならなかった1867年から81年の間の研究所初期以来の伝統が採用された。C.フォン ブンゼンによって提案されたこの伝統は、ローマの研究所での三十年に亘る彼のエジプト研究で形成され始めたものであった。即ち、彼によって指導された1843年から45年の調査旅行は、文献学的方法と考古学的方法が統合されたものであったが、古王国時代からプトレマイオス朝時代に至るエジプトの偉大な時代の最初の明確な歴史像を、結果として生み出したのであり、革新的なアメンヘテプIV世の人物像が、有名になった。このことが、今や再度引き継がれたのであるが、それと共に考古学的な諸々の分野の横の連絡の求めが、必然的に益々専門化されてゆく結果ここ進まざるをえない細分化を防ぐために、愈々強まり、それが実現された。支部の所員によって、数多くの調査旅行が実施されたり、或いは彼らによって支援された。同様に、カイロの研究所支部は、戦争の勃発でその仕事をベルリンに移さねばならなくなるまで、ローマ＝ゲルマン委員会の仕事に対し、委員会自身では主導が無理な企画の際には、学問的拠点として助言したり、支援したりして協力した。エジプトでは、先ず始めに、メリムデ＝ベニサラームそれにギザのヴィーン科学アカデミーによる発掘に言及されねばならないが、次いで、その他では、ヘルモポリスのドイツによる発掘、メアディとギザのエジプトによる発掘、アブ＝ハリブのスウェーデンによる発掘、最後にアメリカによるアピドスの事業に言及されるべきだ。カイ

ロ支部の機関紙は、12巻と1冊の補巻が公刊された *Mitteilungenn des Deutschen Instituts für ägyptische Altertumskunde* である。

また、ドイツ学界の緊急に作られた共同体によるシケムの発掘の際のパレスティナの研究所の様々な関心を代弁し、かつ諸外国の、そこで既に活動している研究所との関係を保つために、本拠地をアテネにすることと共に本部において、発掘活動に対する調査報告者の立場が確立された。アエギーナ、ナクソスそれにトロイゼンでは、報告者G.ヴェルターが、独自の調査を実施した。H.ヨルダンが、1938年本拠地をバクダードとする発掘に対する調査報告者として、この立場を獲るが、イラクにおける考古学調査と本部との永続的な一致を保つという課題も背負った。しかし、戦争のために、既に1939年にはベルリンに、この地位は移されねばならなかった。1939年に定められたイラクのイスファーハンにおける調査報告者の地位は、もはや全く有効な働きをなすことは出来なかった。

最後に、1942年11月にスペインに創設された研究所支部には、1943年5月マドリッドに非常にささやかな書庫が開設された。H.シュルンクによる実際の、かつ控えめな指導は、スペイン人同僚たちとの親密な協同作業を可能にした。

研究所全体の最後の大事業は、1939年4月のオリンピアの発掘再開であった。1936年のベルリン・オリンピックとの関連で、元々明らかに学問外で考えられ、この発掘再開は、来るべきオリンピック大会のために、〔\*古代オリンピックがなされた〕競技場を発掘した。その費用は、国家が自由に使わせた。この計画は、ドイツの考古学者たちの間では、先ず懐疑的に受け止められたが、というのは、正直、この事業は、なんら重要な成果はないように思われ、むしろ新たな発掘方法による1875年から80年の大発掘事業の補足と見られていたようだ。しかし、驚きに満ちた発見があった、それは競技場の塁壁に作られていた施設。それと共にアルティスの南側と西側での誤りが修正され、新たな諸成果を獲得するに至り、さらに模範的なE.クンツェによる学術的な指揮は、ギリシア=イタリア戦争の勃発のため1940年に短期間中断したが、1941年まで遂行され得、その十年間での最も重要な学問的成果を齎したのであった。その成果に関しては、引き続いてこれまで4巻の報告書（1941年～44年）が研究所の年報に、そして1944年には、*Olympischen Forschungen*の第1巻が公にされた。第2巻は、間もなく公刊されるだろう。

二度の戦争とこの15年の政治的出来事は、研究所に深刻な打撃を与えた。1914年から1918年までの世界大戦後とその結果起こったインフレーションの際に、研究所は最早自らの仕事を果たすことが不可能になった時に、それは既に現われていた。けれども、戦争において敵対的關係に置かれた国家間の離間は、精神的領域における国際的な協同作業というあらゆる考古学的活動の前提を、粉々に粉砕してしまうかもしれない、と言うほどには深刻ではないことが、間もなく明らかになった。ローマでは、確かにカファレリ宮殿とその小規模の古い研究所の建物や、後の大きな研究所の建物も失われてしまったが、価値のある唯一の素晴らしい図書館は、維持され続けていた。ローマにおける福音教会のお陰で、研究所は、集会所に仮の宿を見出していた。所長としてのH.ドラゲンドルフやローマのW.アメルング、L.クルティウス、アテネのF.シュテウヂニツカ、E.ブショール、それにG.カロのごとき個々の人物の確固としていて共に謙虚な行動、それに学問的な重要性により、また1922年に所長を務めたG.ローデンヴァルトの偉大な組織力によって、危機は、けれども早急に克服された。他の支部と同様にローマでも、図書館は、あらゆる国家の研究者の仕事に開かれていた。1929年には、再び十分に働きをし得る将来性のある研究所は、その創立100周年の式典を、諸外国の学者の全面的参加の下で祝った。

第二次世界大戦の結果とそれに起因する様々の出来事は、研究所にとり、比較不可能なくらい厳しいものであった。この政治的成り行きの過程で、オーストリアの占領後、1939年にオーストリアの研究所が、ドイツ考古学研究所のヴィーン支部として併設されるということが、先ず起こった。オーストリアの二人の代表者が、ベルリン本部に入ったが、オーストリアの研究所は、ドイツの支部そのものと同様の学問的自由を保持していた。ドイツ考古学研究所に統合されていた時代には、取り分け国内の考古学的調査に、その仕事は限定され、それ故、それは、ローマ＝ゲルマン委員会のそれに似たものであった。カルヌントゥムの発掘は、大規模に国家の助成金によってなされたのは当然だった。研究所の雑誌は存続しており、この期間に5巻発行された。その他にも、様々の単行本での出版がなされた。エフェソスの大規模なオーストリアによる発掘に関しては、しかし、別の編纂出版を用意することが出来た。ここでは、国立の研究所との関連により、独立性は遺憾にも失われたにもかかわらず、さし迫る姉妹支部の廃止は、阻止され

たかに見えたが、諸外国にあるドイツの研究所との関係は、益々困難になっていった。

図書館が、政府の命令で、大方のドイツの考古学者の希望に反して、戦争の危険から安全のためにオーストリアに移されてしまった後に、ローマの研究所の所員たちは、1943年の年末までに、この永遠の都を離れなければならなかった。図書館を、教皇の保護下に置くという計画は、党と政府の干渉によって水泡に帰した。同様に、連合国によるギリシアの占領により、アテネ支部とサモサとオリンピアの発掘から去らなければならなかった。

また、あらゆる政治的な苦難による特別な危険に晒される場所から外れていたイスタンブール支部は、1944年に閉鎖され、スイスの外交代表部の保護下に、最初置かれた。無条件降伏により、それまでのドイツ国家財産として、海外の支部は、差し押さえられた。ローマの図書館は、アメリカ軍によりローマに戻され、元の場所に配置された。この図書館は、今日では、「考古学、歴史および文化史研究のためのローマ国際研究所連合」によって管理され、ユネスコと協力して信託施設として活動している。アテネ支部とイスタンブール支部は、これまで、その国の政府によって閉鎖されたままであるが、しかし、重い被害はなく、存続している。カイロ支部は、存続していない。

ドイツでは、戦争によってベルリン本部は、難儀に直面しているが、その大部分は、その図書館や史料室が補充不可能な損害を被ったからである。フランクフルトa.M.のローマ＝ゲルマン委員会は、確かに模範的な整えられた研究所の建物を失ってしまったが、その価値ある図書館は、適切な保護措置のお陰で、存続している。しかし、なお再び利用され得るには至ってない。

ナチス体制期の政治的影響は、研究所をも巻き添えにした。研究所は、かつて一度も、全体としてナチ理念に一致するということにはなかったにもかかわらず、国立の施設として、政府に左右された。人事政策では、ドイツで実施されている法律に気を配らねばならなかったが、この法律によって問題とされる追放に値する研究者たちも、邪魔されることはなかった。しかし、研究所は、その学問的姿勢においてナチスのイデオロギーから免れていたが、例えば、研究所に敵意を持った態度で、ローゼンベルクの影響を受けたラインネルトによって指導された先史時代の研究方向が現われた。ギリシアで通用していた様々の規定を省みもせずに、

ローゼンベルクを権威の印とした戦争中に企画された発掘事業には、それ故、研究所は、全く与り知らなかった。ヒムラーによって導入された《父祖の遺産》Ahnenerbeは、ギリシアに対しかなり穏当な態度を取った。研究所へのナチス党の直接的な介入は、全般的に阻まれ得た。けれども、1936年9月、アテネ支部の支部長の座を占めることと、そのことと関連したオリンピア発掘の指揮が問題となった際に、所長M.シェーデの再三再四の異議申し立てに対して、そうしたことが起こった。この場合、両方を予め考慮した特別に天分が与えられた研究者ではなくて、ナチス党と活発に結びつく方向に歩む一人の専門仲間が、研究所に対し、この二つのために押し付けられ、それ故アテネでは、暫く、研究所の管理と発掘の指揮は、一個人に一体化していた。けれども、既にその当時、真なる者たち、およそ大方のドイツの考古学者がそうであったが、彼らは、アテネ支部にとって、この一人の者が兼ねることは不幸なことだと見抜いていた。幸いなことに、オリンピア発掘の指揮の委託を、ただ代表するものと理解し、この事業の実地的な地域での指導は、一人の人物の手に委ねられたが、彼は、政治的に悩まされなかつただけでなく、その広く、ドイツを越えて認められる学問的意義によって、そこに最初に付きまとった政治的なプロパガンダのための事業という外見から、その発掘が自由にされたのであった。同じ問題ではないが、しかし、大変不幸なことに、ローマ支部には、悪しき影響を齎した。ローマでは、或る研究所員が、ナチス党の幹部になり、それで研究所の建物の中に党の支部が入り込んだ。考古学研究所とその他のローマに存在するドイツの学問的研究所を、党の国外組織の中に吸収せしめるという党によって追求された目的は、直ぐに知られた。研究所全体の教養の危機、その当然の帰結として途方もない状況、またその結果生じる萎縮する学問の重要性と、のさばる政治的重要性、こうしたことから目を背けてしまうことが可能であるということが、A.フォン ゲルケンとベルリン本部の考え方によるローマの研究所運営の結果として、生じ得たのである。

## II 研究所の組織

研究所の組織は、連邦国家的基盤に基づいており、1904年まで追記された1887年4月9日の定款で与えられた。この定款によれば、研究所の課題は、考古学および文献学の隣接分野において古代の芸術と学術の故郷とその学問研究の間の交

流を盛んにし、整えること、およびギリシア、ローマ時代の歴史記念物を網羅的に公にすること、であった。その他に、研究所の傍らには、特別の委員会—ローマ=ゲルマン委員会—が存在したが、それには、ローマ=ゲルマン時代の古代研究の奨励ということが割り当てられていた。ローマ=ゲルマン委員会の形式に範をとって、時が経過する中で、なお次のような専門委員会が、創設された。即ち、かつてのカイロ支部に、古代エジプト研究、パピルス研究およびイスラム研究の、かつてのイスタンブール支部には、古代小アジア研究、ビザンチン学、イスラム研究およびトルコ学の、そして最後に、マドリッド支部には、スペインの古代研究とイスラム研究の。これらの各委員会の委員長は、支部長であり、そのメンバーは、一部はベルリン本部から、また一部はドイツの諸大学の専門家から選ばれた。

研究所の様ざまの仕事、事務総長が務めたが、1928年勤務上の表示は、所長とされた。彼は、ベルリン本部のトップであり、その決定に縛られた。崩壊前には、ベルリン本部は、帝国首相によって任命される政府の選んだメンバー1人と連邦諸邦の諸政府によって任命された古代学の専門家から構成され、考古学的研究のための考古学講座の教授職にも関与していた。これらのメンバーに関し、プロイセンが7人を占め、その内3人は、プロイセン科学アカデミーの推薦であって、バイエルンが2人を、ザクセン、ヴェルテンブルグ、バーデン、ヘッセン、メクレンブルグ-シュベリン、およびテューリンゲン諸邦が、各1人を推薦した。更に3人のメンバーを、ベルリン本部の推薦に基づき、帝国首相が任命した。それ故全部で議長と18人のメンバーから本部は構成された。各支部の支部長が、本部の会議に招かれることもあり得た。

本部には、議長役の所長と上級官庁の代表者、1人の正規のメンバー、それに本部によってその仲間から選ばれた2人の代表者でもって、より緊密な委員会が作られた。本部のメンバーの任期は、5年間で、再任も可能であった。

ベルリン本部は、主要な研究所所員を選び、彼らを帝国首相に推薦した。さらに本部は、名誉所員、正規所員それに通信所員を任命し、学術的な諸目的のための方策の利用とか、予算変更の提案とかを決定し、さらに帝国首相に対し、様々な旅費奨学金の貸与のための推薦を行った。各奨学金の総額は、3000マルクに達した。結局、古典考古学に対し4人、キリスト教考古学に対し1人、エジプト学に対し1人、建築史に対し1人、さらに古典考古学に対し少し額の少ないヴェル

フィング奨学金が授けられた。先史および初期史に対しては2人の奨学生が、ローマ＝ゲルマン委員会によって推薦された。古典考古学に対する奨学金は、必要な場合、分割され、より上級の学校の教師に与えられた。

最後に公表された、1939年4月1日付きのメンバー表によれば、名誉所員は10人、正規所員は430人、それに様々な国の通信所員は426人を数える。

研究所の中樞は、ベルリンである。目下のところ、研究所の本部（ベルリン、アメリカ占領地区）とローマ＝ゲルマン委員会（フランクフルトa.M. ヘッセン州）が活動している。

1945年の破滅の後、本部は、所員の死亡とか不可避的なる退職によって、極度に弱体化し、それで、所長職には、規約に沿って、若干の別の所員に本部で委託し、任じていた。

1949年8月29日、30日の本部の会議で、本部は、補欠の選挙を行い、新たに成立した。今後、将来、また、2人の専門家仲間が、非主流的立場から本部に所属することになろう。

### III 研究所の諸課題

研究所の本来の仕事の領域、言わば古典的な地中海沿岸の諸地域や隣接したオリエント、およびエジプトから、研究所が切り離され、さらに外国のかつての支部の今後も、未だ不確かな状況であるということによって、たとえ研究所を取り巻く環境が、本質的に変化しているとしても、基本的には、研究所にその始めから据えられて来た課題は、決して変化していない。この課題は、新たな様々な史料の報告であり、散乱している歴史的記念碑等の集成であり、考古学の後継者たちの養成である。その学問的故郷との遮断、またその博物館に現存する過去の文化上の作品の多くを収めている世界のそれ以外の国々の学問との遮断も徐々に緩められ、これらの課題の第二、第三の実現は、条件付きで可能とされるか、あるいは、全く不可能かであろう。けれども研究所は、これらの課題をその視野から見失いはしないだろう。大きな集成の仕事に関しては、今日の政治的状況が長期に亘っても、その仕事だけは、既に集められた資料が存在しているのだから、継続され得る。それには、ローマの石棺のレリーフとか、ギリシア東方の墓のレリーフが該当する。後継者の育成には、奨学金を与えられる可能性ということに尽き

る、特に質の高い若い学徒を、何ら特別課題もなしに、十分な金銭的な旅行奨学金を以って、地中海沿岸地域に送り出し、そして彼らにその地で絶対に必要不可欠な古代の歴史記念碑を見せるための仲介をなすことである。外国の地の支部は、その若い旅行者たちに、指導と講義を通じて、頻繁に彼らの為していることについて意見を聞くことを認めてきた。この全てが、今は断ち切られている。しかしそれでも、特に困難な状況と格闘している後進たちに対する配慮を、研究所の最重要責務として看做さなければならず、とに角、ドイツでは、考古学は、今後も存続すべきなのだ。若い専門仲間に、いやまた年食った専門仲間に、それ故、地中海沿岸地域へ向かう方途が再び開け、彼らが、そこで、最も控えめな要求ではあるが、その可能性を生み出し、成果を伴う研究に従事すること、これが重要なことなのである。その他、初学者は、その学位論文の公刊の際、支援されるべきだ。先史および初期時代史との密な関係にあり、研究所は、ドイツ国内の考古学的調査にも特別の注意を払うべきであろうし、いわゆるローマ-ゲルマン研究は、古典考古学の一部門として、力を振るって促進するべきであろう。しかし、あらゆる面で考古学者にとって最高の教育機関である古典的な地中海沿岸地域に向かうことが、再開されること、そのことが、獲得すべく努める主要目標であり続けている。

後進たちの問題に関しては、教育機関がまた考えられねばならない。既に以前から、研究所は、Wandtafelの発行を通じて、教育機関が、良い視聴覚教材を自由に使用ができるように取り計らってきた。高等教育機関の教師たちは、休暇中の講習とか、地中海沿岸地域への案内とか旅行に参加することで、より深い考古学的訓練が与えられてきた。研究所は、こうした諸課題を、益々強く引き受け、また研究所の刊行物でもそれらを考慮しなければならない。自身が含まれる文化についてよりも、古代の文化についての知識を生徒たちに仲介するということが、重要でなければならないとしても、この点は、単に言葉によるものではないだろう。たとえ特別に興味を持ったり、或いは基礎知識を身につけた教師たちの意のままになったとしても、古代が生み出した目に見えるものをただ援用するだけでは、充分ではない。未来の教師たちの考古学の教育が、これからは常に強く大学に求められなければならない。将来のための健全な文化的基盤と必要不可欠な精神的自由を保障するために、諸邦の文化的な固有性を深く考慮しながらも、再度

明白に共通なものに調整されねばならない教師のカリキュラムや学生のカリキュラム作成、また試験実施規定の際に、仲介者の役割を果たすことが、研究所は可能である。

新たな史料を明らかにすることは、最後は研究所による公刊に懸かっている。このためには、第一に自分の雑誌を自由にし、そうすれば、それらをいっそう広く伝えることが可能である。Archäologischen Anzeigerと共に研究所のJahrbuch、それに毎年の文献目録は、継続されている。Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Institutsが、以前の外国支部の様々なMitteilungenに取って替っている。ローマ=ゲルマン委員会では、GermaniaとBerichte der Römische-Germanischen Kommissionが継続して刊行されている。

研究所のこれまでの発掘事業から、数年に亘る仕事のための有り余る素材が存在し、それらの公刊は、発掘責任者の不可欠な責任である。この責任は、ドイツの学問に対するものでもあるが、何よりも先ず全ての国の学問にとって価値を持つ。ここで、幾つかの発掘を取り上げてみよう。小アジアでのボガズキョイ、ペルガモン、ミレト、ディディマ、ギリシアでのオリンピア、アテネのケラメイコス、テサイオン、ティリンス、テーベのカピレン神殿、それにボエオティアのオルコメノス、アエギナ、サマスのヘライオン、この戦争中に、クレタでなされた発掘、コルフでのアルテミス神殿、イタリアでは、ガレアタのテオドリッヒ王の別荘、ポンペイにおけるヘレニズム期の芸術に関する刊行の完成等。

ドイツ・オリент協会の財産の損害によって、研究所は、近東におけるドイツの発掘活動にも配慮してきた。ここでは、バビロン、アスール、それにヴァルカにおける発掘調査を公刊することを継続しなくてはならない。

発掘調査の結果を公刊することと共に、研究所は、なるべく、個別的な刊行物を公刊することも支援すべきだろう。発掘調査の公刊は、資料が様々な失われてしまうことや、また、よくあるその現場の再調査が不可能であるため、かなりゆっくりにしか進められないがために、個別的調査を支援することは、特に重要になる。全てのこうした仕事と共に、研究所は、文化的諸観点を再び結びつけることや、またこのことを通じて、共通の合意に至るための重要な貢献をするであろう。しかし、ドイツ自体では、西欧文化の大黒柱のひとつである古代についての知識

を保持し、かつ有効に保ち続けるのに、研究所は、寄与するであろう。

〔訳者付記〕

論文中の人名は煩わしさを避け、片仮名表記のみをしたが、以下に欧文表記を掲げておく。大体記載順である。+印がある11人は、下記参照。なお、ユンケル論文の後に、総括的付記を記してある。

W.von Humbolt. B.G.Niebuhr.C.von.Bunsen+. E.Platner. E.Gerhard+. Ampere. O.M.von Stackelberg+. Charlotte Buff. A.Kestner+. Th.Panofka+. Friedrich Wilhelm+. A.Thorwaldsen+. C.Fea+. Duc de Luynes+. J.Millingen. Fr.Welcker+. Duc de Blacas d'Aulps+. Fürsten Metternich. Lepsius. Th.Mommsen. Jahn. U.Henzen. A von Velsen. C.Wachsmuth. U.Kohler. O.Lüder. E.Petersen. W.Dörpfeld. P.Wolter. E.Curtius. A.Conze. A.Humann. H.Schliemann. A.Furtwängler. H.G.Lolling. Baedeker(?). G.Loesehcke. W.Helbig. A.Mau. H.Nissen O.Benndorf. R.Schöne. Th.Schreiber. Fr.Matz. F.v.Duhn. W.Amelung. G.Lippold. G.von Kaschnitz. H.Dütschke. H.Heydemann. R.Kekulé. H.v.Rohden. H.Winnefeld. C.Robert. J.Stuart. N.Revett L.v.Sybel. P.Hartwig. R.Zahn. E.Langlotz. B.Graef. E.Buschor. G.Oberländer. Th.Wiegand. L.Borchardt. G.Welter. H.Jordan. H.Schlunk. E.kunze. H.Dragendorff. F.Studniezka. G.Karo. Rosenberg. Himmler. M.Schede. A.v.Gerkan.

以下は、Anita Rieche, *150 Jahre Deutsches Archäologisches Institut • Rom – Eine Photoausstellung von Philipp Schönborn, veranstaltet von der Theodor Wiegand Gesellschaft* 1979.に、〈北方人たち〉および〈創設者たち〉として掲げられた人物のそのキャプションである。Winckelmannは別格扱いであるが、ここでは略する。

〈北方人たち〉

Eduard F.W.Gerhard.1795-1867.文献学および考古学者。協会の事務部長。1860年から協会会長。

Otto M.B.Stackelberg.1786-1837.考古学者および画家。協会の名誉会員。

August G.Ch.Kestner.1777-1853.外交官。芸術品収集家。図案家。1825年から1849年までローマ駐在ハノーファー大使。

Theodor S. Panofka.1800-1858.文献学者および考古学者。協会の事務部長。

〈創設者たち〉

Christian C.J.F. von Bunsen.1791-1860.プロイセンの外交官。1823年から1838年まで、ローマ駐在プロイセン大使。1829年から1860年まで協会事務部長。

Friedrich Wilhelm von Preussen.1795-1861(1840年からプロイセン国王Friedrich WilhelmIV世)協会の総裁。

Pierre Louis J.C.Duc de Blacas d'Aulps.1771-1839.芸術品収集家。古銭学研究者。1829年から1839年まで協会会長。

Friedrich G.Welcker.1784-1868.考古学者。ボン美術館アカデミー創設者。協会のドイツ支部長。

Honore Theodoric P.J.d'Albert, Duc de Luynes et de Chevreuse.1820-1867.考古学者。芸術品収集家。古銭学研究者。政治家。協会のフランス支部長。

Bertel Thorwaldsen.1768-1844.デンマーク人の彫刻家。協会の芸術マエストロ。

Carlo Fea.1753-1836.法律家。考古学者。ローマ古代遺物委員。協会の会員。

出典：Carl Weickert,

*Das Deutsche Archäologische Institut Geschichte Verfassung Aufgaben*  
2.veränderte Auflage. Berlin 1950. (出版社名は記載されていない)